



は内的、つまり精神的、知的な方向に進んでいる」と

いう。ゆりかごから墓場まで、人が心の中に豊かな気持を持って、

楽しく送る――それがレジャーだという。

だから、職場で働いていても機智に富んだ会話を楽しみ、レジャー化する。不幸

や困難すらも、それを乗りこえたとレジャーになるという。国や州の政策にもそれが表われ、レジャー政策はスポーツ・文化省が担当している。

そうしたカナダ人のレジャー意識を満足させるために、レジャー産業が成り立つ。たとえば、カナダの観光消費は昨年

は百一億ドルと前年より一三・三%の伸びを示している。海外での観光赤字が財政の足を引っばっているが、「レジャー

用に消費する食物や機械類を広く加えると、レジャー全体では必ずしも赤字ではない。従来

の分類を改める必要があり、議論を変え

る必要がある」(マーサー局長)ということになる。

な変化が出ているという。

第一は旅行でも一定の個所に長く滞在する傾向が一段と盛んになってきていることである。そのため、カナダ国内のリゾート地域の見直しが始まっており、公園やスケート・リンク、プールなどのコミュニティ施設がいつそう拡充されようとしている。

第二は、女性が職場に進出し出して、レジャーの決定権が主婦に移りつつある点だ。十年ぐらい前まではほとんど男性が主導権を握っていたという。それが女性に移り出して、様々な変化が生じ始めているといわれる。

第三はレジャー時間とレジャー費用が増加したこと。休暇は一、二か月が普通になり、世代的にも子供は大学を卒業するとすぐにレジャー消費にかなりの金を向ける余裕が出ている。この傾向はますます増大するとみられている。

第四は、コンピュータの普及や輸送など各種の施設で技術革新が急速に進んでいる点である。レジャーがきわめて合理化され、便利さを増している。

第五は、レジャーの社会システムが発達してきた点だ。教育が高度化し、周囲にはテレビ、新聞、書籍類など教養、知識を満たすものが豊富になっている。レジャー情報が完備され、レジャーの選択や過ごし方が賢明になってきた。この最後の変化が最も影響力を持ち、社会全体に「レジャー革命」を起こしていくものとみられている。

日本と比較して、このようにカナダの

人たちが非常に割安で、レジャー生活を楽しめる点特徴としてあげられる。一流のオペラでも、コンサートでも、お芝居でも安い。十ドルも出せば、絶好の場所から見られる。ゴルフは一ラウンド五ドル以下だし、スキーもスケートも料金は安い。これは国や州がこうした文化面に財政補助をしていることもあるが、妥当な料金でないと繁盛しないように、カナダの大衆の方が賢く需要を作っている背景が響いているように。

こうした「知恵」は、コミュニティに根づいている多様なクラブ組織でも分る。多くは家庭の主婦が幹事になって、体育クラブから各種レジャー、はては日本のお茶や生花のクラブすら作られている。

特に、冬が近づくと、こうしたクラブの勧誘がふえ、幹事から家庭に入会の誘いの電話がかかる。一週間に一、二回、この種のクラブに参加して、同好の仲間たちと親しくつき合う。それはまた家庭交流にもつながっていく。コミュニティのつき合いが深まっていくのだ。その運営は多くは主婦たちのボランティア活動である。「家庭にとじ込もっていない

無償だけれど社会奉仕することは、それなりに有意義だ」と、ある主婦はいう。

こうしたクラブは主婦の社会活動、冬の雪ごもりが半年以上も続くこと、またカナダ国民が異民族から成っているため、お互いにクラブを通じて交流を深めるネライで普及したのだろう。

カナダのレジャーを現実にカナダに暮しながら観察すると、至る所に合理的で最大の成果をあげようとするカナダ人の知恵と工夫を発見する。そして、戦後の日本人が経済の高度成長の過程でいつの間にか見失った色々な断面を見つけているのだ。

たとえば、近所の人たちとコミュニティで親しくつき合い、親から孫まで三世代が一所に集い、昔からのいい面を語りついでいく――などは、昭和の前半まで日本に残っていた風習であった。

カナダで急増する日本人観光客を見ながら、はたして忙し気に旅行していく人たちがカナダ人のこうしたレジャー面を見つめていくだろうか、と疑問に思うことがある。日本でも最近では経済だけでなく、歴史、文化を見直そうとの風潮が芽生えている。

ひと頃のレジャー・ブームは、日本では欧米からのレジャー産業の導入に走り過ぎた嫌いがあった。これからはカナダや、米、欧州の、こうしたそれぞれの国民が作り上げたソフトウエアに、関心の目を向けることが重要になろう。

(日本経済新聞トロント特派員)

